

英語の文主語構文再訪

左周辺部の精緻化構造の観点から

神谷 昇

1. はじめに

本稿では、英語の「文主語構文」について、左周辺部の精緻化構造 (Rizzi (1997)) の観点から分析を提示する。「文主語構文」は、文頭にある補文が述語の主語のように見える構文を指し、(1) がその具体例である。

(1) [That the doctor came] surprised me. (Koster (1978: 53) ; カッコは筆者による。)

よく知られているように、文頭に置かれた文主語は主語よりもむしろ、話題と同等の振る舞いを見せる (Koster (1978), Alrenga (2005))。例えば、話題が文頭に生起している文に主語と助動詞の倒置を適用することができないのと同様に、文主語構文にもそれを適用できない。この事実は (2) に示されている。

(2) *Did [that John showed up] please you? (Koster (1978: 53) ; カッコは筆者による。)
cf. *Did [John], the article really bother? (Alrenga (2005: 179) ; カッコは筆者による。)

このような事実から Alrenga (2005) は Koster (1978) を踏まえ、文主語は CP に基底生成される「話題」であること、また、主節内にはそれにより束縛される音形のない DP が存在し、それは基底生成位置で意味役割を付与された後、主語位置を経由して CP に移動することを提案している。しかし、「基準凍結」 (Rizzi (2006)) をふまえるとその DP は主語の位置で「主語基準」 (Rizzi (2006)) を満たすことで凍結し、CP に移動できないと考えられる。

以下では Rizzi (1997) の提案する精緻化された CP 領域の構造と Rizzi and Shlonsky (2007) が提案する「名詞的な Fin」を踏まえて文主語構文の派生と文主語の内部構造を検討する。

2. 分析

今日にいたるまで、幾度となく文の構造が検討されてきた。そして Rizzi (1997) では従来の CP 領域は、ForceP, Top(ic)P, Foc(us)P, Top(ic)P, Fin(ite)P の複数の階層から構成されていることが提案されている。また、Rizzi and Shlonsky (2007) は、Fin には名詞的性質をもつものがあることを主張している。

本稿では、上述の精緻化された左周辺部の構造 (Rizzi (1997)) の観点から Alrenga (2005) の分析を捉え直し、文主語構文の派生には空演算子の移動に加え「名詞的な Fin」 (Rizzi and Shlonsky (2007)) が関与していることを主張する。つまり、文主語構文はおおよそ (3) の構造を持つことを提案する。

(3) [TopP [文主語] Top [FinP Op_i Fin_[+N] [SubjP Subj [vP ... t_i ...]]]]

(Op は空演算子、Fin_[+N] は名詞的な Fin、SubjP は Subject Phrase、t は空演算子の痕跡を表す。SubjP の指定部位置は空であることに注意されたい。)

名詞的な Fin を文主語構文の派生に導入することで以下の帰結が得られる。はじめに、(3) の構造に示すように、名詞的 Fin が主語基準を満たすことにより空演算子が主語位置を経由せず、その結果、それが主語位置で凍結することなく上方に移動できるようになる。

また、(4) (= (2)) に例示するように、文主語構文では主語と助動詞の倒置が許容されないが、これは、助動詞が Fin を経由する際に、前者の持つ動詞的特徴と後者の持つ名詞的特徴が相容れないために派生が破綻すると考えることができる。

(4) *Did [that John showed up] please you? (Koster (1978: 53) ; カッコは筆者による。) (= (2))

3. 文主語の内部構造

次に文主語の内部構造を検討する。ここで重要となるのは遠藤 (2009) の指摘である。遠藤は日本語の副詞節を検討し、ある機能範疇の指定部に生起する副詞節のサイズは、その機能範疇の補部のサイズと同じかそれ以下でなければならないと主張している。文主語は副詞節ではないが、主語や述語を備えた文であり、また、話題と同様に、いわゆる A' 位置にあることから、本稿は遠藤の指摘が文主語にも適用できると考える。つまり、[Spec, TopP] にある文主語は、(5b) に示すように、Top の補部と同様、名詞的 Fin を主要部とする FinP であり、名詞的性質を持つと主張する。

- (5) a. [That the doctor came] surprised me. (Koster (1978: 53) ; カッコは筆者による。) (= (1))
 b. [_{FinP} [_{Fin} [+N] that] [_{SubjP} the doctor came]] surprised me.

よく知られているように、分裂文の焦点位置に生起するものは名詞的性質を持つもの（例えば、名詞句や前置詞句）に限られるが（Emonds (1976) など）、文主語の主要部が名詞的 Fin であるため、文主語は名詞的性質を持ち、分裂文の焦点位置に生起可能である。(6) を参照されたい。

- (6) It is [that Bill will ever be this late again] that is unlikely. (Delahunty (1984: 81) ; カッコは筆者による。)

また、文主語は FinP であり、節のサイズが小さく、TopP が文主語内に存在しないために、話題やそれと同等の性質を持つ文主語は、文主語内に生起できない。(7) と (8) を参照されたい。

- (7) a. *[That Mary, your antics will upset] is obvious. (Alrenga (2005: 179) ; カッコは筆者による。)
 b. *[That [for Bill to smoke] bothers the teacher] is quite possible. (Koster (1978: 53) ; カッコは筆者が追加)

- (8) [_{FinP} [_{Fin} [+N] That] [_{SubjP} ...]] is ...

↑
that 節内に話題／文主語の入る余地がない

4. 間接疑問文が主語である文主語構文

最後に、(9) のような間接疑問文が文主語である例について検討する。

- (9) However, [whether it is an entirely environmentally friendly process] remains to be seen.
 (British National Corpus ; カッコは筆者による。)

文頭に置かれた間接疑問文は、that により導入される文主語とは異なり、名詞句主語と同等の性質を持つ。例えば、(10) に挙げるように、間接疑問文が文主語である場合には、主語と助動詞の倒置を適用することができる。

- (10) Was [who is coming] ever decided? (Alrenga (2005: fn. 2) ; カッコは筆者が追加)

この理由については以下のように考えることができる。はじめに、間接疑問文には wh 移動が関与しているので、それは、wh 句の着地点である [Spec, ForceP] を備えた ForceP であると仮定する。もし、間接疑問文の文主語が [Spec, TopP] に基底生成されると、その位置にはせいぜい FinP までの句しか生起することができないという制約により、派生が破綻してしまう。派生の破綻を避けるためには、大きなサイズの節を収容することができる [Spec, SubjP] にそれを生成することが必要である。そして、その位置は名詞句主語が生起する位置でもあるので、文頭に置かれた間接疑問文は名詞句主語と同等の性質を持つようになると考えられる。

5. まとめ

本稿では英語の文主語構文の統語構造を検討し、主節には名詞的な Fin があり、それが主語基準を満たすこと、また、that により導入される文主語は名詞的 Fin を主要部とする FinP であることを主張した。また、間接疑問文が文主語の場合には、それは ForceP であり、[Spec, SubjP] に生起することを議論した。

謝辞

本稿は 2023 年 5 月 20 日に関東学院大学関内キャンパスで開催された日本英文学会第 95 回全国大会における研究発表に基づくものである。発表の際に有益なコメントをくださった聴衆のみなさま、ならびに司会者に感謝申し上げる。本稿における誤りはすべて筆者の責任である。

主要参考文献

Alrenga, P. (2005) "A Sentential Subject Asymmetry in English and its Implications for Complement Selection," *Syntax* 8, 175-207. / Delahunty, G. (1984) "The Analysis of English Cleft Sentences," *Linguistic Analysis* 13, 63-113. / Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to Syntax*, Academic Press. / 遠藤喜雄 (2009) "(Anti)-symmetry in Syntax," *Scientific Approaches to Language* 8, 1-26. / Koster, J. (1978) "Why Subject Sentences don't Exist," In *Recent Transformational Studies in European Languages*, ed. S. J. Keyser, 53-64, MIT Press. / Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," In *Elements of Grammar*, ed. L. Haegeman, 281-337, Kluwer. / Rizzi, L. (2006) "On the Form of Chain," in *On Wh Movement*, eds. L. Cheng, and N. Corver, 97-133, MIT Press. / Rizzi, L. and U. Shlonsky. (2007) "Strategies of Subject Extraction," In *Interfaces + Recursion = Language?*, eds. H-M. Gartner and U. Sauerland, 115-160, Mouton de Gruyter.